

## 六月作品

## 月集スバル

☆今月の四人☆（桑原正紀選）

余光

水島 晴子 兵庫

今年またむらさきに藤咲くべし師の春日野の歌碑のかたはら  
かんむりの黄金さやけく立つ雛の絵手紙受けつ弥生朔日  
日の余光いまだただよふ夕ぐれを山桃は幹しろじろと立つ  
目に見えて指ぢから落つ鉢もて菓子の袋の封切りてをり  
生き延びし「タロ」「ジロ」愛し南極でそを導きし「リキ」なほ愛し

虹は希望を

福士りか 青森

さみしいと言へばさみしくなるころ驚はひつそり片足で佇つ  
雪の野に眠れるごとし点滴のはやさが時を統べる病室  
かうやつて病人になつていくのだらう光に消されてゆく昼の月  
クリスタルのペーパーウエイト置く窓辺 ひかりは虹を虹は希望を  
さくらいろのカーテンを引きめぐらせて眠れりとはき春雷のなか

副反応

田中 愛子 埼玉

母よりも背たかき子もひくき子もわやわや集ふ女子中学前  
今さらと思ふこと増えティーバッグを二回三回ふりて引き上ぐ  
高野さんと電話ではなししたること伝へて母をよろこばせたり  
セールのやうな推奨あやしめどファイザー、モデルナ交互接種す  
ワクチンの副反応でへこんでる間に結婚記念日すぎぬ

梅は泰然

鈴木 竹志 愛知

厳冬の日々やうやくに春めいて梅園などものぞきに出でむ  
梅の園枯れ木となれる幾本がありて花咲か爺を待つにや  
浄き花あまた咲かせる梅の木の気概といふをこのころ信ず  
美しきわが花を見よと迫り来るわけでもなくて梅は泰然  
急いではいけないと言ふ声がするわが人生の師の栗屋誠陽氏の

☆

☆



奥村晃作\* 東京

国際興業の路線バス一〇分おきに来る「赤塚八丁目」乗り場に待つ湧き水の池持つ見次公園は巨き台地の崖下に在るよく肥えたカルガモ四〇羽、マガモ一、オオバン二羽が交じる池の面風強き大寒の空青く澄み池の釣り人いたく少なし寒中に咲く蠟梅は冬花で他の黄の花に先駆けて咲く

武田弘之 神奈川

森重香代子 山口

艶あでに咲く木五倍子ぶぶしの花は寺庭に見る由もなし枝を折られて寺庭におかめ桜の咲くかたへ棗なつめの花の芽吹きいまだし散りそめて白木蓮は花びらのその白妙を道の上に置く事多く九十年は過ぎにけり百までの日々穏やかにあれ樂しみて生きてゆくべし日本の言葉があれば短歌があれば

朝床に愚図愚図と居て後のなき大事な一日を台無しにする冷蔵庫の小抽出し一つ開かぬなり突つ掛かつてゐるのは何だらう自転車にも乗れないままに老いし身よとほとほとただた歩むほかなし伴なはれ移動せしのみ ヨーロッパの古き街区の不意になつかし岩波の「図書」の表紙絵、二月号もて司修の担当終る

高野公彦 千葉

日影康子 富山

ウクライナはいま灼熱の荊棘ほらせき線を巻きて耐へつつ咲ける昼顔烏国兵死うごくへいにて露国ろこくの兵も死す露が攻め込みて烏を侵す日々「プーチンがプーチンと切れて、うっ暗いな」令和四年の巷の狂句武力もてロシア帝国肥大せりと司馬さん書けり『ロシアについて』プーチンは強権をもて奪ひしよ良き平原のあるクリミアを

迫り出して屋根より落ちむとする雪の先に小さなつららが光る外出をする日もあらむとロツカーに掛けぬし夫の服片付けぬこの朝も常臥の夫の玉子がゆ炊くひそけさよ春が来てゐる老い深み臥す夫看つつ思ひ出す生家の寺の長寿なりし父を寺背戸の藪に萌えぬむ露の薑見にゆけず口惜し怪我癒えずして

古屋 祥子 群馬

狩野 一男 東京

「痛い痛い」言はず これまで楽しくも生きては老いて来るを思へ  
緩やかにまた急速に薄れゆく記憶よ明日は如何なるわれか  
狂ひたる山茶花に一つ蕾付く河津ざくらの咲ける陽気に  
鋪装未だ無き頃が頻りに思はれる足下の弾み土のやさしさ  
霜ばしら踏む足触り<sup>あしざは</sup>楽しみて野みち畦みち跳ねて歩みき

影山 一男 千葉

宮里 信輝 神奈川

平野歩夢の青空は消え爆音が響くテレビよそろそろ消さむ  
和泉屋のスイートポテト今はなき麻布の味が口中を占む  
ラインにて卒園式の写真来ぬ息子一家は未来を見つめ  
プーチンもゼレンスキーも知らないが訳なく人が殺されてゆく  
七十の初心者にして性のこと思ひ浮かべる一夜もありぬ

桑原 正紀 東京

小島 ゆかり 東京

ひと月を経て退院の妻あはれ三十五キロに痩せて現る  
点滴で生を保ちし妻に訊けばまづおにぎり食べたいと言ふ  
沿道に咲ける桜を見せながらゆつくりと行く介護タクシー  
横たはり首を左右にひねりつつ今年のさくら妻は見得たり  
ひと月を働かざりし胃腸ゆゑまづは管もてそつと入るると

さくら咲く三月サリンささやかれ くるしみし過去今に引き摺る  
木蓮のむらさきの花見上げつつ考へてをりくすりのリスク  
東京で生まれ育つて 広島県出身首相になつて、半年  
ゼレンスキー大統領よ堂々として勝て、プーチン大統領に  
ウクライナのメディア「キーウ・インディペンデント」信頼すべし  
桜木町駅から徒歩で約一〇分「神奈川婦人会館」閉館  
ランドマークタワーに窓から覗かれて聞かれてゐたる神奈川歌会  
緊急事態宣言の後は蔓延防止措置の二年間休会してゐた神奈川歌会  
二年間休会をして一名も感染者なし神奈川歌会  
長年の神奈川歌会盛会をありがたう「神奈川婦人会館」

抽出しにあるはずの鍵さがすうち春のゆき春のあめとなりたり  
雪が雨になり雨がまた雪になり みるみる猫もわたしも老いぬ  
けぶりたつしろい疾風は早春の少女のごとく坂かけのぼる  
いちまいの夜空はためきウクライナ・ロシア停戦協議中、また  
反戦ははるかなる虹 見えながら指さしながらだれも触れず

木 畑 紀 子 京 都

迫害で両目ぬかれしルチアの名残る舟歌よサントラルチーア

悠久の時間をくぐり口づてにひとは暗黒を光に変へき

道家の祖老子伝説そのひとつ「老子は無名の多数」宜しも

獅子たちが舞ひあそぶがにをちこちの竹叢吠えておほきく撓ふ

七賢人いまさぬ春の竹林を住み処にスズメ、ヒヨが出入りす

島 田 暉 神奈川

空襲の炎の下をくぐり逃げ子を負ひし母火達磨になる

爆撃の猛火はげしく風を呼び逃ぐる人みな焼けし棒杭

逃げてゆくりヤカーの荷や背負ひし荷火が燃え移り悲鳴の怒濤

焼夷弾の油脂がモンペに降りつきて火達磨の人水放射さる

爆撃止み火焰の下に残りし人頭髮は焼け服は黒焦げ

大 松 達 知 \* 東 京

自転車に託びるころは、ほのぐらきじゆうにばんに鎖してきたりぬ

オクススヨム茶飲みおりオクススがとうもろこしでスヨムがひげで

しろたえの namasteneपालिहि をよかぜのむこうはつかに嗅いで

環七のカンを二つの輪に乗って cross/across 越えてゆくなり

まだ先のまたまた先のチケットがまだまだ冬のスマフォにありぬ

田 宮 朋 子 新 潟

『罪と罰』戦争と平和』生みし国いま隣国に攻め入るといふ

大画面には核兵器ちらつかす邪智暴虐の王がうつりぬ

侵攻にいたるシナリオ聴きながら関東軍の山口をおもふ

戦火せまるキエフの街の映像に猫をかかへて避難する人

悪意世に満ちてウイルスバスターがなくては機能しないパソコン

津 金 規 雄 神奈川

朱の蕾ひらけば白き木瓜の花のつらなる垣は細流に沿ふ

プーチンの正気危ぶむ報のあり 日本列島暖気急上昇す

アスファルトの路上に小さき影落とし初蝶の皓まつすくに行く

ウクライナ、ロシア、ベラルーシ、ポーランド 国家とは何ぞ改めて思ふ

佐保姫の衣を透かして射し来たる陽に温みをり雨後の庭土

小 山 富 紀 子 京 都

国中のねむりうばはれ泣く声の電波にのりて流れくる春

コンビニの生花売場に目もくれず棚荒しゆくロシア兵士ら

戦争の報道見ずに過ごしたしひと日ひと日と春めきゆくに

春を待つ球根たちも爆風に飛ばされたるか故郷の土より

空爆のニュース聞きつつ雛かざる戦時越え来し百歳の雛



後藤美子 北海道

終日をふぶきて暮れぬこもり居の安逸の果て積もるストレス  
道路幅狭まりバスが運休す通勤通学大混乱つづく  
遠ざかる雪堆積場増設の清田区、石狩市にトラック連なる  
記録的大雪に次ぎ記録的高温予報最高八度  
雪融けて大きい水たまりえいと跳ぶずつしり重き買物袋

清水正子 神奈川

藤野早苗 福岡

廃炉へのみち遠けれど彼はいま物理少年の日の夢を追ふ  
原発は「プロメテウスの第二の火」あの魔の事故が進路みちびく  
原子力学会で発表せしといふ論文のレジメが祖母にも来たり  
廃炉への技術開発のシミュレーション：読んでラインでエール送りぬ  
天の火をもらひし人類の文明史いつの時代も鍵はエネルギー

小嶋一郎 佐賀

風間博夫 千葉

此処までの道程みちのり思ひ拾ふなり十四、五粒の米ヒノヒカリ  
籠り居のこの昼つ方靴下を手に填めて拭く出窓のガラス  
くしやみして肋骨を折る咄をば笑はずに聴く漫談なれど  
髭剃りも三日越しなるだらしなさを家居にマスク欠かさずなりて  
六びきの野良猫率あわが庭を占領するは黒のプーチン

サル一匹電線渡りゆく都内確保するまでニュースとなりぬ  
「窓明かり」窓からもれる光とも窓からさしこむ光ともあり  
椿象つばきむしなどと読んではいけません「椿象」へヒリムシは俗称  
青椿あを、落おち、寒かん、玉たま、寺てら、唐椿たう、夏なつ、花はな、浜はま、姫ひめ、冬ふゆ、藪椿やぶ  
〔椿姫〕ヴェルディ作曲歌劇にて「道を踏み外した女」を原題とせり

橘 芳 園 新 潟

水 上 芙 季 東 京

還俗をしたるわが身のすがしきは俗世俗人隔てし思ひ  
そそぎ得ぬ科となしにき還俗は病みぬし母の死を早めたり  
片羽をもがれしままに逝きにけむわが還俗を見届けし母  
還俗を妻も友らもよかりしと言へどよきことしたと思へず  
信あるが如くふるまふ背を人に長く見られてゐたる歲月

水 上 比 呂 美 東 京

大 野 英 子 福 岡

銀座地下三階にある異空間亡者が降りくるGINZA SIX  
鵜使ひの尉じょうが松明消すときに舞台へ押しつく火を消すしぐさで  
障しやうのもの怪けのもの魔ものを呼び出せる横笛、小鼓、大鼓、太鼓  
これが能かと思ふほど笛はづみ太鼓はづみて閻魔あらはる  
殺生を悔い改める鵜使ひを救ふ旅僧の経ぎやうゑゑ 唳りやうりやう々々

原 賀 環 子 東 京

松 尾 祥 子 東 京

水としてのんだグラスの液体がお酒と気づく 戊夜にめざめて  
シヨックなり親族をまへに子の言へる宇宙人とはわれのことらし  
ルビ用のめがねで鏡をのぞくとき額ぬかにひろがる枯野が原よ  
幸せにどんかんだから不幸にもどんかんなのか冬のもののおもひ  
（倒してえ、倒してえ）と叫んでるやうなかたちなりワイングラスは

川向かうの桜に会ひに行くことができさうでできない微震の春  
落ちてゐるフリーパー強風に捲られてをり（春の楽）（：カフエ）  
春のわれ逆算をして明日駅で笑つて来週チャイムを鳴らす  
鼻の奥むずむずとする春先のテレビは明し戦火映して  
戦争の、新型コロナの、そして地震の 毎日聞けり新たな死者数  
今朝はどんな恐ろしきニュースがあるのかと思ひテレビをつけられず つける  
専制主義を振りかざしゐるいちにんを誰か罰してくれぬかすぐに  
あの男のカレンダーが売れてゐたといふ日本さびしき島国である  
なまぐさく土匂ひたつ枯れ芝のあはひに芽吹く若草あれば  
掘りかへす枯れ芝とわれを吹き飛ばす勢ひ、ときに春疾風過ぎ  
百一の伯母語りある動画見せ根気失せたる母を励ます  
歌できぬ母よりわれが悲しくて母に買ひたり歌書くノート  
音たてて風わたりゆく神田川ゆらりゆらゆらゆれる芽柳  
三歳の子にいたはられ十六夜の月照らす道ゆつくり帰る  
だれかれの面影浮かびまた消えて育つ赤子よ生れて半年